

〈修士論文要旨〉

脱同一視現象と自尊感情

— その関連要因の探索 —

梶 谷 健*

【問題】

自尊感情とは、自身に対する肯定的な感情、自分自身を価値ある存在とする感覚である。自尊感情に影響を与える要因として様々なものがあると考えられる。例えば、集団同一視に関する研究で、内集団に対して肯定的な感情を向けることで、間接的自己高揚を行い、自尊心が高まるということが明らかにされている (Cialdini et al., 1976)。

同一視の研究においては、「集団同一視をしていない」者に自身の所属する集団を含めた下位の集団を卑下し、上位の集団を賞賛する脱同一視の現象が見出されている (池上, 2004; 池上・石田, 2005)。

脱同一視と自尊心に関連した研究はこれまでほとんど行なわれていない。しかし、自分の所属している集団を下位集団同様卑下する脱同一視の性質から、現在の集団に所属せざるを得ない自身も卑下される対象であるため、自尊心を低下させると考えられる。つまり、脱同一視をした場合、自尊心の低下を引き起こすと推案できる。

ちなみに、個人が所属している集団は一つであるとは限らない。他に同一視している集団が存在するならば、そこで自尊心の高さを維持できるため、他に同一視できる集団を持たない人よりも自尊心の低下は抑制されると考えられる。

また、脱同一視の原因となった経験の記憶が薄れることで、そのことによる自尊心の低下効果は緩和されると考えられる。

そこで、本研究では、下記の仮説を立てることとする。

- (1) 脱同一視をした者は脱同一視をしていない者と比較して自尊心が低い傾向がある。
- (2-a) 他に同一視することのできる集団をもつ者が脱同一視を行うとき、他に同一視をもたない者が脱同一視を行ったときよりも自尊心は低くない。
- (2-b) 脱同一視の経験を持ったとしても、学年が上昇するに従い、自尊心が低い傾向は緩和される。

【方法】

1. 回答者の性別、学年、年齢、学部、学科を記述。無記名で行う。

平成18年度 *社会学研究科社会学専攻 (社会学コース)

2. 質問項目に関しては自尊心を測定するための自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) の日本語訳尺度 (山本ら, 1982) の10項目を質問Ⅰ、大学同一視尺度 (池上, 2005) の28項目を質問Ⅱ、奈良大学に入学するにあたり、志望順位は何位であったのか問う項目を質問Ⅲ、同じく奈良大学入学にあたり、どの種類の受験方法で合格したのかをたずねる項目を質問Ⅳ、他に同一視する場所を持っているかを調査する項目を質問Ⅴ、他大学に所属したいかどうかをたずねる項目を質問Ⅵとした。以上の6つの質問からなる質問紙を作成した。3. 奈良大生男女を対象とし、2006年11月に、複数の講義内で実施した。実施時間は約10分程度。回答者数は448名で、有効回答数は431 (男性266、女性160、無回答5) となった。

【分析】

同一視群の分類

同一視の尺度の分析について記述する。本稿では、大学同一視測定尺度 (池上・石田, 2005) を使ったため、分析方法もそれになった。具体的には28項目の質問を因子分析 (最尤法、直接オブリミン回転) し、得られた二つの因子の内の第一因子は該当集団に対し、積極的に否定しているイメージを持っていることを示す質問で多くが構成されていることからNegative Identify Scale項目 (以下、NIS項目と略記) と名づけた。第二因子は該当集団に対し肯定的なイメージ、または、よい評価であるか懸念することを示す質問で多くが構成されているためPositive Identify Scale項目 (以下、PIS項目と略記) と名づけた。そして、因子分析結果の因子行列において、両因子に負荷が強い (基準は0.3以上)、あるいは両因子に負荷が弱かった項目を削除した後、残ったNIS項目11項目とPIS項目7項目を作成し中央値を項目別に算出した。この中央値を基準としてNIS項目とPIS項目各々の高群と低群に分け、その高低の組み合わせにより四群に分類した。具体的にはPIS高群・NIS低群の組み合わせに該当する者を、当該集団を肯定的にとらえ、集団の否定が少ないことから、集団に同一視を行う「同一視」群、PIS低群・NIS低群の組み合わせに該当する者は当該集団を肯定的にも否定的にもとらえず、集団に同一視を行っていない「非同一視」群、PIS低群・NIS高群の組み合わせに該当する者を、当該集団に対し、肯定的にとらえず、積極的に集団を否定することから、集団同一視を積極的に拒否する「脱同一視」群に分類した。PIS高群・NIS高群の組み合わせに該当する者に関しては、(池上, 2005では) 言及されていなかったが、本研究においては、肯定的同一視の下位尺度の質問の中にいくつか見られる、よい評価であるかの懸念を示す質問に注目し、評価を懸念している度合いが強く、積極的に集団を否定している群と考え、「スティグマ意識群」と命名し、言及した。

仮説の検証

仮説1の検証

文学部と社会学部間では大学入学の際の偏差値の差もあり、同一視に影響を与えられられるため、学部 (文学部と社会学部) とPIS項目の高低、NIS項目の高低を固定因子とし、従属変数を自尊心とした三元配置分散分析を行なった。結果、PIS項目と学部の交互作用に有意差が見

られた ($F(1, 386)=5.14$ $p < .05$)。この結果は、PIS項目得点が高い者はPIS項目得点が低い者と比較して、文学部であった場合は自尊心が高く、社会学部であった場合は自尊心が低くなることを示している。(表1参照)しかし、PIS項目、NIS項目、学部の主効果、PIS項目とNIS項目の交互作用、NIS項目と学部の交互作用、PIS項目とNIS項目及び、学部の交互作用は見られなかった ($F < 1$, n.s.)。NIS項目に関する主効果、交互作用に有意差、あるいは傾向差も見られないことから、脱同一視群と他の同一視群との間に自尊感情得点に差がないといえる。従い、仮説1を支持する結果とは言えない。

表1 PIS項目とNIS項目、学部と自尊心の関連性

PIS	NIS	文学部	社会学部
PIS低	NIS低	3.06 (SD=0.75)	3.05 (SD=0.92)
	NIS高	2.82 (SD=0.90)	3.01 (SD=0.70)
PIS高	NIS低	3.15 (SD=0.72)	2.87 (SD=0.78)
	NIS高	2.93 (SD=0.86)	2.68 (SD=0.64)

仮説2-aの検証

この分析では脱同一視群を対象を限定して、他の同一視集団の有無を固定因子に、自尊心を従属変数とした一元配置分散分析を行なった。しかし、この結果からは、他の同一視集団の有無に関しては有意差、あるいは傾向差も現れなかった ($F < 1$, n.s.)。

また、大学に対し、脱同一視している者が大学以外に同一視する集団を持つ場合、その集団が学内の集団であるか、あるいは学外の集団であるかという違いには意味があると考えられる。それゆえ、他に同一視している集団が学外の集団か学内の集団か、あるいはその他の三項目に再分類したものを固定因子に、自尊心を従属変数とした一元配置分散分析を行なった。しかし、その分析でも有意差、傾向差ともに現れなかった。 ($F < 1$, n.s.) 仮説2-aを支持しない結果であると言える。

仮説2-bの検証

この分析では脱同一視群に限定して、学年を固定因子に、自尊心を従属変数とした一元配置分散分析を行なった。しかし、結果は、学年において有意差、傾向差も現れなかった ($F < 1$, n.s.)。仮説2-bを支持しない結果であると言える。

追加分析

本研究において初めて確認されたスティグマ意識群に関しても、本分析とは別に脱同一視と同様の分析、さらに他要因との関連の分析を行なったが、志望順位と自尊心の関連に傾向差が見られるにとどまり ($F=2,338$ $df=4$ $p < .1$)、他の要因や仮説の条件における有意差、傾向差は見られなかった。 ($F < 1$, n.s.)

【考察】

本研究で注目した「スティグマ意識群」について考える。今回使った質問ⅡのPIS項目の中には、他者に対する懸念の項目も含まれる。すると、PIS項目とNIS項目がともに高い値を示すことは決して不自然ではない。他者などの評価を懸念し、集団をネガティブにとらえる認知傾向をスティグマ意識群、他者評価の懸念はしないが、集団をネガティブにとらえる認知傾向を脱同一視と考えるのである。

また、興味深い知見が調査結果から得られた。自尊心、PIS項目得点、NIS項目得点の平均を算出した際、池上による先行研究の結果と比較して、大きな差が存在した。それはサンプルをとった場所によりこの研究は変動する可能性を示唆している。

今後の展望として、脱同一視の研究において、価値観という概念が重要になってくると考える。この場合における価値観とは、集団に所属する者が何に価値を重く置くのか、である。例えば、大学を例に挙げると、親からの強制によって大学入学を決めたために、何の努力も投資も行わず、とりあえず入学できればよい、という程度に修学に価値を置く者と、絶対にこの大学に入学するのだという強い意志に基づき、何年もの努力と多額の投資をした者とは、修学集団に関する価値に対して差が生じて然るべきである。前者の場合、自分の中で価値を重く置いていない分野であるため、仮に脱同一視を行っていても自尊心が低下しないことも考えられるのである。